

The Gallery voice NO-62

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2021.6.19
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

— 風ちりていみぐる —

金城明一

滴る緑の中で キームムの実が朱く染まる頃 島の
梅雨が明ける
スーマンボースーに磨かれた空を見上げ もいだ
実をガリリッと齧れば キレのいい歯触り 甘酸っ
ぱい味が口の中に広がる 夏の到来を告げる夏至
南風は ファンファーレを響かせながら島々を渡
る まぶしい白雲と共に 梅雨前線を北へ北へと押
し上げ めくるめくほどの青を披露する 私はうっ
とり雲の渡りを眺め 思う存分深呼吸し カーチー
ベーを浴びる

♪ 島々に 青天いななく 風渡り 宇余り

絵を描き始めて何年になるだろう 思えば20代の
頃よりアマハイ、クマハイ 方々をホロホロ巡り歩
いて描いてきた 赤瓦家に白瓦家 トウタン家に
角出しコンクリート家 風景たちはターバーゼー
クされ 同じ時代の空気を共有し 人々もひと繋
がりだった 油絵の具を手にした白いキャンバスに向
かう日々 ウチナーンチュのボディラングージが
そのドゥームチネーが風景にも投影され 南方の
画人は喜々として画布に定着するのに専念した
時代にはその時代に見合った筋肉がある 首里の
下方にある高校に通っていた頃 坂を登って見た
首里の眺めは分厚い石垣に石畳 屋根の赤瓦には
幾度も漆喰が塗り重ねられ なんとチビラーシ
カッタ 赤瓦家は瓦ではなく 漆喰なのだなと
感じた 味わい深い情緒を醸し出すには手まひま
がかかり そして何より十分な時間が染み込んで
古酒のような味わいになるのだろう
当時の重厚な風景は人々の筋肉と悠久の時間とで
築き上げた風景だったのだなあ

ところが・・・風景にも寿命がある
当時バンジだった馴染みの風景たちも次第しい
にクタビレ 一個消えまた一個消えて この頃
はすっかり様変わりしてしまった・・・老いゆく
ウチナー風景 その後ろ姿に筆は戸惑い顔して
ここ数年止まっていた

画描きも日常は人並みに折々の世事にウロウロす
るしかなく カンレキを越えた辺りから ようよ
う来し方をふり返る余裕が出来る “還暦”とは
よく言ったもので再びのスタートラインの感があ
る 2回目の青春がぶり返す感じだ 絵に出会っ
たあの時代の諸々が高揚感を伴いながらフツフツ
と蘇って来るようだ



イカダカズラとセメンガーラ家 (油彩/F12号・2021年)

変貌激しい沖縄だが ウチナー風景の描き手の最
終ランナー世代として せめて私なりのお気に入り
たちをしっかりと形にして残して行こうと思う
六十路なかばに至りようやく絵の具もほぐれて空
間の往き来も自由になりつつあり そろそろ筆を
タクトに 目に親しんだ風景たちと島々の物語を
奏でるとしよう

人は誰しも時に運ばれ自ずとタソガレエリアへと
入ってゆく・・・

だが中身は恥ずかしいほどに愛おしい程に変わら
ないものらしい 年をとるのは難しいものだ と
このごろつくづく思う 画が生業の私は つまり
は子供の頃に培われた感性を 絵を介して確認し
形にする役回りらしい

2021. 6. 12

(画家/きんじょうめいいち)

優しさのなかに

越智新介

大阪中之島美術学院1年生の時、デザイン科から油絵科に金城くんは転籍してきました。何故かは知らなかったが(資料より)彼が言うには「脳みそが食べるだけで、なかなか短期間で結論をだせないタイプなんです」
彼は爽やかな笑顔で直ぐにみんなと仲良くなった。クラスは12人ほどで、沖縄県出身者が2人になりました。いつの間にか私は沖縄から来た金城くんと浦崎くんと行動を共にしていた。そして2人に絵を教わり、物の見方や考え方を教わった。そして、狂気に似た絵画への陶醉が始まった。

デッサンをする金城くんのなんとも柔らかい指使い。しなやかに動く木炭。石膏像を見つめる太くて長い睫毛。途中間をおく動作。油絵を描くときの絵の具の合わせ具合。筆をやわらかく持ち色を置くタッチ。すべてをやさしく包み込んでいく動きにウットリした。

夏休みの宿題に描いてきた絵の評価をしているときだった、金城くんのスケッチに描かれた絵にみんながオーと唸った。それは多肉植物のエケベリアの絵でした。
美しく透き通る淡い浅葱色を身にまとい、触ればプリプリ感じるような絵だった。
油絵の多い中で水彩スケッチが、みんなの目を奪いました。
ちなみに、その時の私の絵の評価は「棺桶に足を突っ込んだ絵だな」と先生。

あるとき、金城くんは私に「いつもドロ鼠色の服を着ているな」と言った。
その時は何も言い返すことができなかったが、当時彼も色褪せたTシャツにくたびれたよくわからん服を羽織っていた。お互いによく似たものだった。
私達はファッションに興味がなかった。金もなかった。
私達の価値観がどんどん変わっていった頃でした。目に入るもの、耳に聴こえるもの、五感を通して入ってくるものをどのように表現するか。
何を描きたいのか。なりふり構わず求めていた。

3人で冬の早朝、御堂筋の中央分離帯にキャンバスを置き油絵を描いたり、中之島公園祭りで似顔絵を描いたりした。また、3人で絵のことについて対談形式でそれを文集に載せようとしたが私に全く考えや意見が無くボツになったこともあった。

卒業製作展で彼は見事に金賞に輝きトップ成績で卒業した。

題名は「カフェにて」女性が中央でコーヒーを呑んでいる。表情と動きのある愛らしい女性。背景は確かレンガ色に黒、全体によく描き込まれていて彼の優しさが溢れていた。

卒業後 金城くんから時々はがきや手紙をもらっていたが、筆不精の私は返信することがなかった。ブログを始めたから見てくれ。ということで、たまにコメントを入れたりしていた。毎日配信される絵やコメントを覗きに行く楽しみができた。彼は学生の頃1日1枚絵を描くと決めて努力していたのを思い出す。優しさのなかに頑固な一面を見た。



美術学校時代のスケッチブックより (1975年)

2011年 香川県で個展をすることになった。30年ぶりの再会となった。その時のことは皆さんの想像にお任せする。彼の絵は見事に沖縄を描いていた。島特有の風、あの炎天下の光と陰、美ら海、過ぎゆく雲そして赤瓦。金城くんは言った「俺にとって絵を描くことは飯を食うのと同じなんだ。」

(美術工房ナガレ/おちしんすけ)

金城明一展

「風ちりてい みぐる」に寄せて

THE Gallery Voice No-62.2021.6.19 画廊沖縄

内間直子

画家金城明一さんの存在を知ったのは、数年前に写真家國吉和夫さん宅を取材で訪れた時のことである。玄関から入ってすぐのところに飾られていた油画に一目で惹かれ、思わず「すごい！どなたが描いた絵ですか？」と聞き、初めてその名を耳にした。何度も沖縄を訪れ、取材に同行していたカナダ人の写真家Greg Girardも同様の関心を示し、決して明るい色では無い、湿度を帯びたような沖縄の80年代の風景画を前に二人とも圧倒されたのを覚えている。

当時、親しくしていた故・国吉宏昭さんに金城明一さんという画家を知っているか尋ねると、かつてクラフト国吉ギャラリーで彼の展覧会を開催したという。その話しをした数ヶ月後に画廊沖縄で約十年ぶりの展覧会があると知り、初めて本人にお会いしてじっくり作品を鑑賞する機会を得た。まさに巡り合わせというか、作品の力に引き寄せられた不思議な展開であった。



前島にて (油彩/F15号・1982年)

それと前後して、たまたま手にした1983年発行の郷土月刊誌「青い海」に、金城明一さんと版画家名嘉睦稔さんの対談があった。野生的なイメージの睦稔さんよりもさらにワイルドな印象の明一さんの当時の姿に驚いた。対談の中で言葉は少ないものの沖縄で表現することについて、視覚的なモノだけじゃ捉えきれない部分を、肌感覚まで動員して「影の湿った中にガジャン(蚊)がいるようなところ」まで描こうとしている姿勢に、観る者が惹きつけられる理由があるように思う。

現在の明一さんからは80年代の作風と風貌は程遠い印象だが、激しく燃えるように油画を描いた時代から、現在のような優しい水彩画を描くようになるまで変わらないものがある。一貫しているのは沖縄を描くことに対する等身大の視点で、油画も水彩画も触感や湿度まで感じる場所である。沖縄の日常や風景を目のキャッチボールという風に、対話するように捉えている。それらの行為がシンプルであるがゆえに心に深く、一層響く。油画も水彩画もどちらも明一さんの表現であり、今後、両方を融合させていくかもしれない。



新聞紙上のバナナ (水彩・2021年)

81年の展覧会を鑑賞した画家稲嶺成祚さんに「激しく燃立つ絵、これはすごい。おどろいた。」と言わしめたように、沖縄の風景を長年に渡って見つめ続けるその眼差しは、今後さらに注目され、再評価されるであろう。今回の展覧会タイトル「風ちりてい みぐる」とあるように、明一さんの作品は彼の手を離れ、ゆっくりと確かな赤い炎と青い炎を燃やしつつ、風と連れ立って転がりながらどこまでも遠くへ行きそうである。

(アーツマネージャー/AIO事務局長/うちまなおこ)



金城明一アトリエにて・2021年5月

金城明一が描く沖縄

田原美野

「美しい景色や景観を描いた絵」というのが、風景画における一般的な認識であろう。写実性を重視するのであれば、そのリアルさとともに、何がどう描かれているのかを評価の一つとし、心象風景であれば、実際に見えないものを、オリジナルな表現形態によって描いた「風景」とも理解される。沖縄の画家、大嶺政寛（1910～1987年）が伝統文化への誇りとウチナーンチュの生きるエネルギーを赤瓦屋根に込めたように、あるいはまた、大嶺信一（1915～1984年）が戦後の米軍統治下で、変わりゆく沖縄社会の喘ぎを心の風景としてとどめた様に。では、金城明一が描いてきた80年以降の沖縄・オキナワは、そして今描かれている日常とは、どのようなものだろうか？

1975年、金城は大阪にいた。地元沖縄の工業高校を卒業後、手に職をと、大阪の美術学校デザイン科に進学する。しかし油絵科へ途中編入、絵画表現と出会う。金城によれば「デザインにくらべ油絵具を用いた絵画表現は、ウチナー訛りで、ドゥーチームニィが許される、沖縄の肌質に合っている」と思ったという。

四季折々の美しい風景、静謐で凜とした日本文化に圧倒されながら、しかしそこで劣等感に陥ることはなく、むしろ沖縄との「違い」を強烈に感じたナイチでの暮らし。金城は「自分と向き合う日々を得られた」と当時を振り返る。そのころの沖縄といえばアメリカ世からヤマト世への「世替わり」を経験し、海洋博が賛否ある中、華々しく開会宣言されるなど、沖縄が懸命に日本へ追いつこうとした時代でもあった。

その後金城は沖縄に戻り、塗装業をしながら制作、作品を発表していく。80年初期の金城の作品は、荒々しく画面に油具をたっぷり盛り込んだアジクター（濃い味）の作風で知られている。描いたのは、老若男女行きかうマチヤグワァーに、風が通るスージグワァー、年季の入った民家にハル仕事（畑仕事）に勤しむオジヲオバァ。画面からは沖縄の匂いが立ち上る。

しかし80年後半から、激しさは影を潜め、支持体に月桃紙を選び、水彩絵具で透明感あふれる沖縄を描くようになる。「今は、風景それ自体に、安定感が無くなっているように感じる。時の流れと共に、沖縄の風景も変化し、作品も変わっていったのかもしれない」と自己の変遷を冷静に語った。

失われていく、親しみ、愛しんだ沖縄のモノたち。「風景の葬式」と作家特有の持論を展開するも、そこに寂しさや喪失感は無いか？と思わず訊いてしまった。「すくいあげたい。すくい上げるべきものをみつけない」とつぶやいた。

金城に描きたいと思わせる、沖縄のモノたちは、日に日に姿を消してゆく。今展はそれを象徴するように、色とりどりの自生の草花や、みずみずしい果物たちが会場に活力を与える。私たちが見ている金城明一の描く沖縄は、もはや心の風景となりつつある。水と油の両方を使う独自の描法を用い、画面に落とし込まれる色彩やフォルムの濃淡や強弱は、作家自身のバイタリティーである以上に、沖縄を真摯に見つめ続け、その変化に敏感に反応してきた金城の描く、現在進行の沖縄である。「67歳にしてやっと自由な表現ができつつある」と話す金城。その言葉の裏には、風とともに、これからも沖縄を見続けるという、しなやかで柔軟な覚悟があると感じている。オキナワがヤマト世になって50年となる節目を前に、作品の前に立つ私たちは、その表現を感受できるかが問われている。（画廊沖縄スタッフ/たはらみの）

【金城明一 略歴】

- 1954年 東風平生まれ
- 1975年 中之島美術学院卒業（大阪）
- 1981年 個展（国吉ギャラリー/那覇）
- 1985年 「ニーハオタイワン!!肝騒の心」（画廊沖縄）
以降2000年まで画廊沖縄で定期的に個展
- 2007年 — うっぴ —（画廊沖縄）
- 2018年 — 島の陽と風を浴びながら —（画廊沖縄）
- 2021年 — 風ちりてい みぐる —（画廊沖縄）
絵画教室アトリエ遊 主宰